



TITLE:

静脩 Vol. 35 No. 1 (1998.9) [全文]

AUTHOR(S):

CITATION:

静脩 Vol. 35 No. 1 (1998.9) [全文]. 静脩 1998, 35(1)

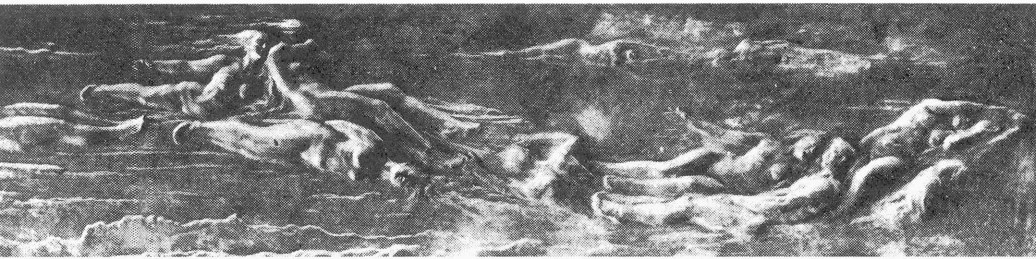
ISSUE DATE:

1998-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/66025>

RIGHT:



「ハイブリッド型図書館」の充実を

附属図書館長 菊池光造

1. はじめに

今われわれは、本格的に「ハイブリッド型図書館」の時代を迎えたといってよい。すなわち、従来型の書籍・文書資料を中心とする教育・研究情報を蓄積する「従来型図書館」と電子化された学術情報の増大、いわゆる「電子図書館」の展開との併存・補完関係の定着である。むしろ、従来型図書館の機能の延長線上に、急速に展開する情報技術に媒介されて電子図書館が展開されつつあることはいうまでもない。しかし、コミュニケーションの基盤や手段が異なる以上、両者の間にはさまざまな面で違いがあるのは当然である。図書館としての課題は、双方を充実させつつ、いかにシームレスかつ効率的に図書館全体の機能を展開するかにあるといえる。

2. 電子図書館の現在

京都大学電子図書館システムは、今年平成10年1月に正式にオープンしたが、その後運用状態は、かなり安定しているといってよい。一般的にいう電子図書館の内容は、情報の発信、情報の配信、電子出版のサポート、高度な検索・ナビゲーション機能、の四つだとされている。京都大学電子図書館についてみれば、情報発信の面では、1) 貴重資料画像データベースとして、有名な国宝「今昔物語・鈴鹿本」を始め重

要文化財級のものの32点（詳細画像11,951）、2) 明治維新資料画像データベース（詳細画像14,400）、3) 京都大学百年史部局史編第1、第2巻。その他、蔵経書院

本目録、全文テキストデータとして「樋口一葉作品（間桜、たま櫛等6点）」などがある。

情報配信については、35タイトルの電子ジャーナル、CA on CD、MEDLINE、GeoRef、PsycLitなどのCD-ROM版文献情報をネットワーク上で提供している。また、国立国会図書館雑誌記事索引、朝日新聞記事見出しデータベース（戦後50年）のほか、「広辞苑第四版」やOxford English Dictionary (2nd ed.) もオンラインで提供している。

京都大学全体をカバーする図書資料のオンライン検索を可能にしたOPACシステムは、今回導入の新図書館システムによって、各研究室のコンピューター上で、またインターネットなら「いつでも、どこからでも」京都大学所蔵



図書の検索が可能になった。考えてみるとこれは画期的なことだといってよい。

現在、電子図書館へのアクセス件数は、学外サイト（6月3,614）が学内サイト（6月3,195）を上回る形で、延べアクセス件数は1ヶ月平均約16,000件以上となっており、予想以上の利用率を示している。

平成10年度中には、重要文化財画像データ17点（詳細画像2,795）、「富士川文庫」（詳細画像15,000）およびその目録、大惣本目録データベース、京都大学百年史部局史編第3巻、および「総説編」の入力を予定している。また、大学院審議会での検討を待って、今年度中には京都大学博士論文題目データベースを入力・公開したいと考えている。

幸い平成9年度からは電子図書館化の経費が予算化されたので、これからは恒常的な取り組みが可能になる。いずれにしても、電子図書館化の先行館の一つでもある京都大学図書館にとっては、いかにこれを充実させるかが課題であり、これから真価を問われることになるという。その意味においても、今後各部局のご協力を得て、部局所蔵の貴重書・資料、京都大学が創造する学術情報・研究成果の全文テキストデータなどを入力して大学図書館としてのコンテンツを豊かなものにしてゆかねばならないだろう。

またそれだけに、京都大学としてはようやく軌道に乗った電子図書館を今後どのような確かな展望を持って展開してゆくかを考えねばならない時点にきている。こうした状況認識に立って、京都大学電子図書館専門委員会の中に平成10年7月、「中期計画ワーキング・グループ」を設置していただいた。このワーキンググループでの検討をふまえて、年末までには、「電子図書館中期計画」の策定をみたいと考えている。

3. 従来型図書館の問題

さて、電子図書館経費の予算化は、朗報であったが、全体としてみると図書館財政は深刻の度を増している。景気の動向もあって財政構造改革法の扱いは、いまだに不透明な状態であるが、文部省予算の現状は、今年度に始まる集中改革期間3年の間に毎年15%の累積的削減が予定さ

れており、それがまともに従来型図書館のあり方を直撃しているといっても過言ではない。

現在なんといっても知的情報の圧倒的大量は、印刷された「紙」による書籍・文書・資料の形で提供されている事には変わりがない。これを購入する潤沢な財源が無いということは大学図書館にとって命運に関わることだといえよう。とりわけ、図書館を訪れる学生諸君のために、十分な知的環境を整備することができないのは誠に残念なことである。

現在国内だけをとってみても書籍の出版は毎年4万点を超えるといわれ、学術論文の数も日増しに増加している。にもかかわらず、中央館である附属図書館では年間わずかに8,000冊を収書しているのみである。専門分野の研究書については学内60余の部局図書室（館）で購入し利用に供しているとはいえ、大学として必要な知的資源を十分に調達するには遠く及ばないのが実状であろう。

図書館としては毎年概算要求で図書購入経費を要求しているが、学生用図書購入費が認められることは極めて難しい。まさに危機的状況である。幸い教育改善推進経費（いわゆる総長特別経費）の配分を得て、ある程度一般学生用の図書を購入しているのが現状である。それだけに長期的にみて、図書・資料購入の財源確保のために何らかの実効ある方策が必要になるだろう。私見を述べるのが許されるならば、たとえば百周年募金を基盤にした京都大学後援会事業の一環に、附属図書館への支援を加えていただきたいものである。

ところで、われわれが直面する問題として図書の値上り、とりわけ外国雑誌の値上がりがある。これは研究活動にとって大問題だといわねばならない。現に来年度（平成11年度）分については、出版元でのアップ、為替レートでの円安の影響等で2～30%の値上がりが予想されている。雑誌についてこれまでどおりの部数を購入契約した場合、予算額とのギャップは大変な問題を生むこと必至であり、早急な対応が必要であった。この点についてはすでに夏休み中に各部局図書室（館）に購入雑誌の見直しをお願いした次第である。

現在学内で購入している外国雑誌には部局・

教室等の間でかなりの重複がある。この重複は財政上の観点からは問題なのだが、研究者としては手元に置いて、いつでも必要なときに参照できることが必須条件である。この矛盾を解決するには、電子ジャーナルとしての購入とネットワーク上での配信が当然考えられるのであり、学内でも議論されてきた。しかし問題は電子ジャーナルの価格の高さにある。理想としては、共通性の大きい雑誌については中央館が一括購入し、学内の各ユーザーがオンラインで利用する形であるが、図書館予算の現状では事実上これは不可能である。可能な道があるとするれば、関連する部局・教室間で費用負担の調整をして共同購入を行うことであり、さらには一定数の大学間でコンソーシアムを組んで共同購入・配信を行う方向であろう。いずれにしても冊子体を購入するよりも高いコストがかかるのでは電子ジャーナル化のメリットも半減するといわねばならない。

私の見るところ、電子ジャーナルの供給サイドは、新規参入障壁が高く維持され、ますます集中と独占価格の世界になりつつある。この点でも、学術情報の生産拠点であり、知の生産者である大学が共同して何らかの対抗措置を工夫すべきときにきているといえよう。

4. 図書館の仕事と人をめぐって

もう一つ行財政改革に関連して、人と仕事の問題がある。現在進行中の第9次定員削減に続き、さらなる定員削減が見通され附属図書館のみならず各部局図書室（館）でも図書系職員の不足は限界にきていると思われる。今後、より効率的な業務遂行のシステムを実現するように努力することは当然であるが、一方で仕事そのものを見直すことも必要だといえよう。

たとえば図書整理業務の中で目録作成は大きな仕事だが、まだ多くの部局図書室（館）でデジタル入力と同時に従来型のカードも作成し、しかも目録作成基準にしたがって関連箇所にも複数のカードの繰り込みを行っているのが実態ではなかろうか。これは膨大な仕事量であり、職員にとって大きな作業負荷である。附属図書館では1985年から入力したデータのカード化を廃止、これ以降の蔵書はOPAC検索一本とし、

それ以前の蔵書についてはカード検索として、いわばカード化を「凍結」した。

これはあくまでも私見であるが、これだけパーソナル・コンピュータが普及し、新図書館システムのもとで個人研究室から、いやインターネットなら「1日24時間、どこからでも」OPAC検索ができるのだから、一定時点・年度でカード目録は凍結し遡及入力によって徐々にでも減らしてゆく方が合理的なのではなかろうか。「ある年度までの蔵書はカードで、それ以降の蔵書はOPACで」という原則が明確であれば、ユーザーの間に大きな混乱が起こることは考えられない。そうすれば整理業務はかなり軽減され、図書系職員も、別の形でもっと研究・教育への支援活動ができるのではないだろうか。とりわけ大学院重点化がなされ、これからはますますこうした支援が必要な段階に来ているのではないだろうか。

この春私が訪れたLSE（ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス）では、電子図書館化を一挙に推し進め、OPACを整備すると同時にEASI（Electronic Access to Subject Information）と称して研究科の専門分野ごとに各種データベース・Archives・国内および海外の研究所・共同配信電子ジャーナル・有料電子ジャーナルなどへの統一された接続ページを設定していた。これを利用して研究のためには大変便利だと実感したものであった。また、OPAC上で個別の教員に即して教科関連図書リストが提供され、コース・カリキュラムに沿った文献検索のシステムも提供されていた。京都大学内でこうしたサービスがどの部局でどの程度行われているのか、残念ながらまだ包括的な認識は得られていない。いずれにしてもこうした側面は、今後、部局図書室（館）を中心とした大きな取り組みの分野になるのではなかろうか。

さて、この文もいつの間にかまた電子図書館の課題に戻ってきた。附属図書館としては、これからますます部局図書室（館）との連携を緊密にして、京都大学ハイブリッド型図書館の整備に取り組みたいと考えている。

（きくち こうぞう）

印刷文化と手稿^{マニュスクリ}

ヴァレリーにおける〈モノとしての書物〉

人文科学研究所助手 森 本 淳 生

近代における書物の「モノ」としての側面を考えると、当然考慮に入れなければならないのは「印刷されている」という点である。グーテンベルクが印刷機を発明したのは15世紀中頃のことであったが、19世紀になると印刷技術の革新と出版流通革命により、書物も産業資本主義的な大量生産・大量流通の対象となる。書物はいわば「商品」という「モノ」になるのである。書物はこの圧倒的な「複製技術の時代」の洗礼を受け、さまざまな点で伝統的な「オリジナル」の概念は危機に陥いるのだが、ベンヤミンは、このことが反動的にいわゆる「芸術のための芸術」を生み出したのだと述べている。

ここでとりあげるポール・ヴァレリー(1871-1945)は、一方で「技術」を自己の「方法」の中心にすえた批評家であったが、他方では(とくに晩年において)時代の流れに抗して文学を「精神化」しようとする強い傾向をもっていた。ヴァレリーが今なお読みうるとすれば、それはこのような分裂や矛盾においてであろう。

『詩学講義第一講』においてヴァレリーは、文学作品の制作、受容、評価を、生産、消費、価値といった経済学的な用語で考察している。生産され、流通過程にのせられて消費される作品は、まさに「モノ=商品」であり、文学作品の評価もこのような交換過程においていわば交換価値として決定されるのである。文化のまったく異なる民族のもとでは、パンテオンも採石場にすぎず、詩篇も文法難問集に変わるとヴァレリーはいつている。そして、もしこのように作品の価値が交換過程において他者からの評価によって定まるのであれば、制作そのものもそのような交換過程から独立したものではありえない。「人間がひとりになることは困難である」というヴァレリーのことは、制作に没頭集中する作家の頭から読者という他者の観念がけっして離れないことを語っている。交換過程から

自律した「芸術のための芸術」や「純粹詩」など不能なのだということをヴァレリーはよく知っていたのである。それにもかかわらず、彼は文学の「精神化」を試みる。作品とは結局のところ「精神の作品」にほかならず、「精神の行為」においてのみ存在する。書物がまさに「モノ=商品」として大量に生産・流通される時代にあって、そのような流通過程にからめとられないような領域を確保するという夢を彼は抱いているのだ。作品の制作者は他者による価値を気にせざるえないと認めていたヴァレリーが、他方で、そのような交換価値とは一線を画した精神的価値をなんとか回復しようとするのである。

ヴァレリーの有名な創作理論に「作品の完成はありえない」というものがある。彼にとって精神とはひとつの「変形能力」のことであるが、これは本質的に作品をつねに変形(つまり執筆・推敲)し続けるものなのだから、作品の完成は作品の偶発的な「放棄」においてしかありえないことになる。したがって制作の現場としての手稿^{マニュスクリ}は、作品の完成がまったく顧慮されないような「書くために書く」という倒錯的なエクリチュールの場になるほかはない。ヴァレリーの『カイエ』(フランス語でノートを意味する)もこのような場として理解できるだろう。彼は1894年から亡くなる1945年までこの『カイエ』を書き続けた。朝方早く起きてコーヒーを入れ、それをすすりタバコをふかしながら『カイエ』を書きつけるという作業を毎日50年ちかくにもわたり続けたのである(その総数は約27,000ページにもなる)。紙幅の都合で具体的な分析を行うことはできないが、彼自身のことばによれば『カイエ』とは、偶然的な完成を目的とするような「外的生産」に捧げられるものではなく、純粹に自分の精神と向き合い、「生まれたての状態」にある諸観念を精神のもつ無

秩序そのままに書きつける場なのである。その意味で、通常の書物が何らかの首尾一貫性を持ち、常識的な作品が何らかの秩序や終結を含まざるえないのとは異なり、『カイエ』はひとつの「反=作品」であるといえるだろう。一般化していえば、マニュスクリとは、近代の印刷された書物が何らかの形で不可避免的にもたざるをえなかった首尾一貫性や起承転結から無縁な領域であり、限りない反復、削除、加筆、書き換えなどが行われる「反=書物」な場なのである。

こうしてヴァレリーは文学を「精神化」するのだが、注意しておくべきことは、ヴァレリーのいう「精神」とは明晰な知性とか明証的な意識のことではないということである。「精神」とは彼にとっては「無秩序」そのものである。

「作品の生産においては、創作行為は限定できないものとの接触によって生じる」とヴァレリーは書いている。そのため作家は無力であり、制作に必要なものが無秩序たる精神から生じて

くるのを「待つ」ほかはない。すでに見たように、マニュスクリという作家の「私的個人的」領域は、印刷などの複製技術の発達や資本主義経済の発展のいわばネガのようなものとして成立したが、そのように現実世界を回避することで見出された「精神の領域」はヴァレリーにとって無秩序であった。ところがこの「無秩序」こそ彼が『精神の危機』でとりだした現代世界の特徴なのである。作家の親近性の領域として見出されたはずの「精神の領域」は、作家が無力にならざるえないような無秩序の領域、いかなれば現実の世界とは別のもうひとつの「外部」へと変質する。つまり「内部」を通じてもうひとつの「外部」が見出されてしまったのだ。このように近代は、書物を「モノ=商品」としてあからさまに規定するとともに、以上のようなさまざまな現象を文学領域にひきおこしたのである。

(もりもと あつお)

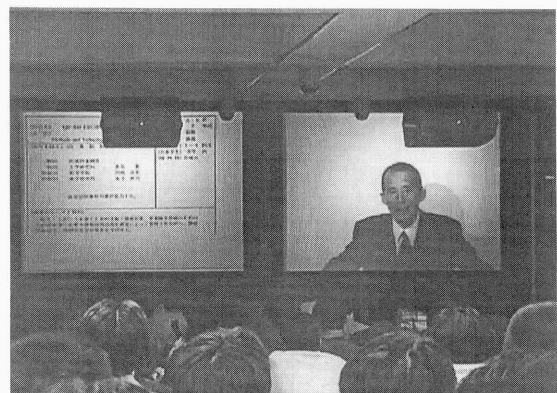
全学共通科目「情報探索入門」の試み 図書館の役割について

平成10年度から、附属図書館が提供部局になって全学共通科目「情報探索入門」を開講した。前期科目として、授業開始日である4月13日(月)にはじまり、7月13日(月)に終了した。長尾真総長は、工学部教授の時代から「情報活用法についてはシステムティックに学生に教育する必要がある。図書館が中心になってやる情報活用に関する講義科目は、全国の国立大学ではほとんど例がないがその先鞭をつけたい。図書館職員の勉強にもなり、図書館職員の学内における存在価値が一層広く認識されるようになる。図書館職員と一緒に情報リテラシーの問題に取り組むことが必要である」と述べておられたが、図書館長時代の平成9年2月に具体的な授業計画の提案がなされ、何度も話し合いを重ねることによって実現するに至ったものである。講義は長尾総長を先頭に、川崎良孝教育学研究科教授、金子周司薬学研究科助教

授、黒橋禎夫情報学研究科講師とリレー式に担当し、最後に菊池光造図書館長が締めくくった。各講義に対応して演習をもうけ、図書館職員は全学から15名が演習を担当する形でこの科目に積極的に参加したことに大きな意義がある。

この科目の概略は次の通りである。

① 開講の目的は、「報告書を書くための情



報収集、卒業論文のための文献調査等に必要の情報活用技術を演習によって習得させながら、情報図書館学、情報探索学の概要を学ばせる。文系、理系それぞれに適した演習を用意し、学生に選択させて具体的な技術を習得させる」ことにある。

- ② 京都大学では学生の科目選択の自由度が大きいという伝統があるので、配当学年は1～4回生とする。ただし、パソコンの使い方を習熟している学生が対象。
- ③ 初めての試みなので1クラスとし、受講者数は100～150人を想定する。
- ④ 開講期は前期とする（特に積極的な理由はない）。
- ⑤ 講義担当教官は、長尾総長の他に菊池図書館長、川崎教授、金子助教授、黒橋講師。
- ⑥ 授業は次の13回として、レポート提出による単位認定とする。

第1講 大学図書館への招待（1回）

第2・3講 分類の一般概念と分類理論（2回）

第4講 情報の種類（1回）

第5・6講 目録情報とその利用法（2回）

第7・8講 データベースの種類とその利用法（2回）

第9・10講 インターネット情報と利用法（2回）

第11・12講 参考資料の種々とその利用（2回）

第13講 図書館情報、および図書館の種類とその機能（1回）

2回あるものについては、1回は演習にする。

- ⑦ 演習においては補助者として図書館職員が協力する。演習補助者は部局図書室からも参加してもらう。

第1講は長尾総長が担当した。（写真）講義は遠隔講義システムを利用できる法経第二教室を使用し、質疑応答時には双方向の遠隔授業となった。第2講以降は総合人間学部の教室と演習室を使用した。第11・12講：「参考資料の種々とその利用」では、附属図書館を会場に1階備付の参考図書を利用した演習も行われた。13回にわたって行われた講義と演習をここで紹介することはできないが、アンケートをとった結果、概ね「役に立つと思う」と好評だった。"来年も開講されたら後輩に薦めるか"という設問には、59.4%の学生が「薦める」と回答している。大変うれしいことである。

（参考調査掛長 慈道佐代子）

シリーズ「京都大学図書館巡り」 序

京都大学には、附属図書館の他、各学部・教室・研究所などに大小合わせて60ほどの図書館・室があります。これらの図書室（館）がそれぞれ独自性を保ちつつ、有機的に連携を取りながら本学の図書館サービスが展開されています。

昨年（1997年）、京都大学は創立百周年を迎えましたが、図書館もそれにほぼ匹敵するくらいの歴史を持っています。この長い時間の中でさまざまな出来事・変化があったことと思えますし、今でも毎日いろいろな動きがあります。そこでここでは、利用者の動向に注目して最近の顕著な傾向を紹介したいと思います。

1つ目は学生の図書館利用の変化です。本学の図書館は、おおよその傾向として附属図書館と総合人間学部図書館（旧・教養部図書館）が主に基礎的・一般教育向けの資料を揃え、各部局図書室（館）がより高度で専門的な資料を揃えているということが言えます。学生たちは教養課程の時代には教養部図書館で過ごし、専門領域に進むに従って各部局図書室（館）に親しんでいくというのが大体の流れでした。ところが1993年3月をもって教養部が廃止されるといきなり各部局図書室（館）に1、2回生が多数訪れるという新しい傾向が見られるようになりました。各部局図書室（館）の蔵書構成は前述

した通りですから、将来の専攻も決まってい
ない、図書館利用に不慣れな 1, 2 回生は書架に
並ぶ本を見てうろうろするばかり。図書館職員
も彼らにどのような利用指導をしたらいもの
か戸惑うばかり。

2 つ目は利用者の大幅な増加と多様化です。
すべての学部で大学院の重点化が終了し、また
独立大学院もいくつか設置され、大学院生の数
が一挙に膨れ上がりました。それと併せて利用
者数を押し上げているのが一般市民も含めた学
外からの利用者の増加です。これは、オンライ
ン目録への登録が進み、学術情報センターの
Webcat により全国の大学図書館の所蔵状況が
容易に把握できるようになったことが大きいで
しょう。これら全国からやってくる利用者に資
料を提供することはもちろん、参考業務、そし
て利用指導に至るまで既存の施設や人員ではと
うてい対処できないほど業務量が増えています。

これらの点について、現在の段階では十分な対
応ができているとは言えません。いかにマン
パワーと予算の不足は否めません。十分な予
算措置と人的配置が切に望まれるところです。

しかし、大学教育の発展に従って、そのため
の蔵書構成は変容せざるを得ないでしょうし、
蔵書の分担配置も変えていかざるを得ないで
しょう。すでにいくつかの部局図書室（館）は
学生用図書費を確保したり、学部生向けサービ
スについて工夫をしているところもあります。
また相互協力、生涯教育の観点から学外の求め
にもできる限り応じていくのも図書館としての
務めでしょう。

次号から各部局図書室（館）をご紹介します。
まず最初は総合人間学部図書館です。
京都大学の部局図書室（館）を利用者が有効に
利用する一助となることを願っています。

（電子情報掛 後藤慶太）

OPAC を使ってみませんか

OPAC はコンピュータを利用した蔵書目録で
す。オパック（オーパック）と呼んでいます。
京都大学で所蔵している図書・雑誌のうちコン
ピュータに入力されているものが検索できます。
研究室・自宅のパーソナルコンピュータからイ
ンターネット経由で利用できます。
内容は同じです。利用しやすいほうを利用して
ください。

Web 版の OPAC は附属図書館のホームページ
から利用できます。

附属図書館のホームページは以下のとおりです。

<http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp>

telnet 版の OPAC は下記のホストに接続してく
ださい。

<Kensaku.libnet.kulib.kyoto-u.ac.jp>

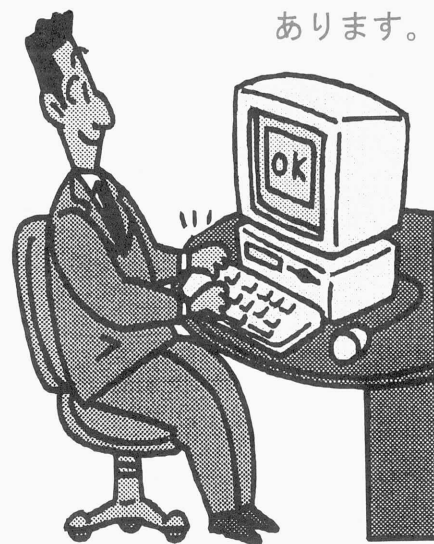
Login: が表示されたら opac と入力、password:
が表示されたら opac と入力してください。

京都大学のすべての蔵書がコンピュータに入力
されているわけではありません。附属図書館の
カード目録も検索してください。

（薬学部図書掛長 渡邊 誠）

Online
Public
Access
Catalog

OPAC には
Web 版と
telnet 版が
あります。



***** 図書館の動き *****

京都大学附属図書館秋季展示会 予告

「日本の西方・日本の北方
—古地図が示す世界認識—

京都大学附属図書館所蔵
室賀信夫コレクション古地図展

開催期間：平成10年10月31日（土）
～11月15日（日）

11月3日（火）休館

開催時間：午前10時～午後5時（入場は午
後4時半まで） 入場無料

会 場：京都大学附属図書館展示ホール
（3階）

附属図書館が所蔵する室賀コレクション
（京都帝国大学文学部助教授であった室賀
信夫先生旧蔵の古地図、地理学関係資料）
の中から古地図約50点を精選し、「蝦夷地
の地理像と新訂万国全図」「ヨーロッパ製
アジア・日本図」「マテオ・リッチ系・蘭
学系世界図」「仏教系世界図の展開」「中国
系世界図」に分けて展示・解説します。

「室賀信夫と古地図研究」のコーナーも
設けます。

記 念 講 演

演 題：洋学からみた室賀コレクション

講 師：松田 清氏（総合人間学部教授）

日 時：平成10年11月6日（金）

午後2時～4時

会 場：京都大学附属図書館 大会議室
（4階）

入場無料

新業務システムについて

平成10年度のワーキンググループが新たに立
ち上がりました。

新業務システムは、ほぼ順調に稼働していま
すが、一部まだ実現していない機能があります。
附属図書館、部局図書室（館）の図書系職員75
名が新システムをより使いやすくするために
ワーキンググループのメンバーとして要望実
現・改善に取り組んでいます。

新閲覧システム

1月から理学部中央図書室、4月から附属
図書館、部局図書室（館）で次々稼働して
います。

現在、附属図書館、総合人間学部、経済学
部、基礎物理学研究所、工学部電気系教室、
理学部中央図書室、物理学教室、人間・環
境学研究科の図書室（館）で閲覧システム
が動いています。

新 ILL システム

新 NACSIS-ILL の本稼働に合わせ京都大学
も新 ILL システムを稼働しています。

4月21, 23日 新 ILL システム説明会。
参加者38名。

9月3, 4日学術情報センターと共催で新
ILL 地域講習会を試行で行いました。

新受入システム

図書受入、雑誌受入システムも4月から稼
働しています。

図書受入トータルシステム、雑誌受入シス
テム、登録番号取得システムの説明会を開
催しました。

来年2月頃に図書・雑誌受入システムの全
体説明会を開催する予定です。

新目録システム

1 月から新 CAT 対応で本稼働している新目録システムは、6 月に CASE 3 機能と、NACSIS—AUTO による一括登録システムが実現しました。

メーリングリストが、全学の連絡・調整に大いに役立ちました。

6 月に学内目録担当職員システム研修会（4 日間）を行いました。10月14日～16日学術情報センターと共催の新 CAT による地域目録講習会を開催します。

電子図書館システム

電子ジャーナルも着実に利用され、新たなサービスの準備をしています。

今年度の貴重資料の電子化は、附属図書館所蔵の重要文化財に指定されている貴重図書と、富士川文庫の一部が電子化されて提供される予定です。ただいま作業中です。

部局図書室からのお知らせ

生態学研究センター図書室

大津本館図書室は、今秋琵琶湖岸の現在地を離れ、大津市瀬田丘陵へ移転のため、9月26日～当分の間閉室の予定です。近年クローズアップされている生態学は、図書分類も DDC21では、Ecology が大きく見直されました。

遠隔地ですが、新しい分野の蔵書の利用をお待ちしています。

なお、京都分室は従来通り利用いただけます。

附属図書館利用統計（平成9年度）

利用対象者数

1. 学内教職員・学生数

28,568人

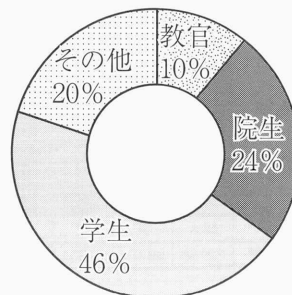
2. 登録者総数

29,993人（平成10年5月1日現在）

（内訳）

教官	3,085人
院生	7,331人
学生	13,525人
その他	6,052人

その他には職員、卒業生、生協職員、スタンフォード日本センター学生、放送大学生等を含む。



入館利用状況

年間入館者総数 781,485人

（内訳）

学内	入館期	775,703
	マニュアル*	3,224
学外	閲覧**	1,640
	見学	918 (人)

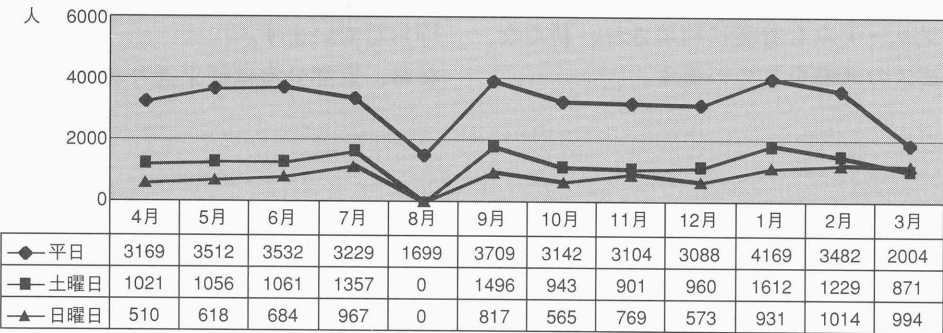
マニュアル*：忘れたり、紛失等による利用証不携帯の入館者
 **閲覧：学外者の特別閲覧手続きによる入館者と共通閲覧証による入館者

入館機による入館者 775, 703人について

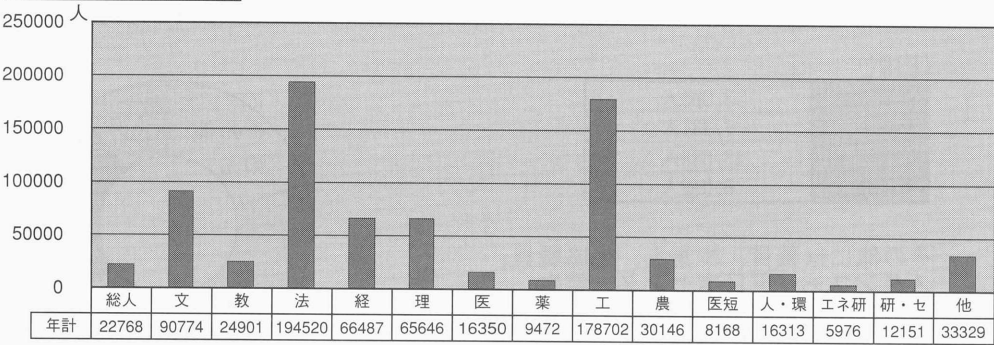
開館日1日当たり	2,577
平日 1日当たり	3,140
土曜日1日当たり	1,131
日曜日1日当たり	753
1日当たり最多入館者数*	5,417 (人)

*平成10年1月26日

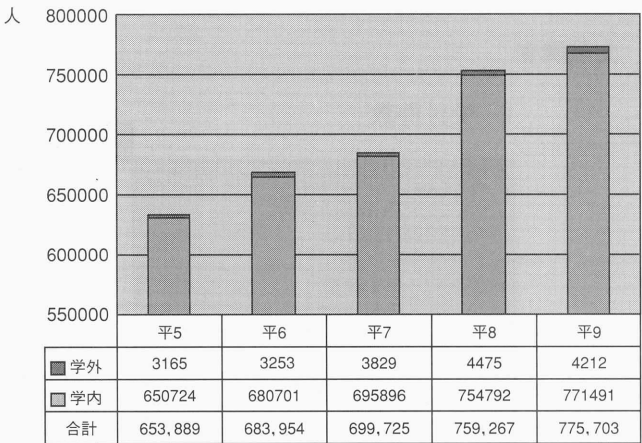
1日当たりの入館者数（入館機）



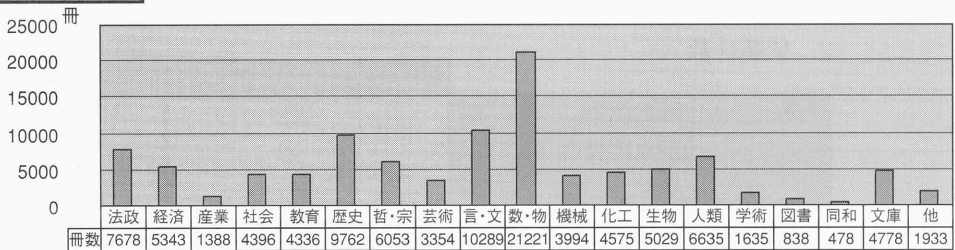
部局別入館者年計



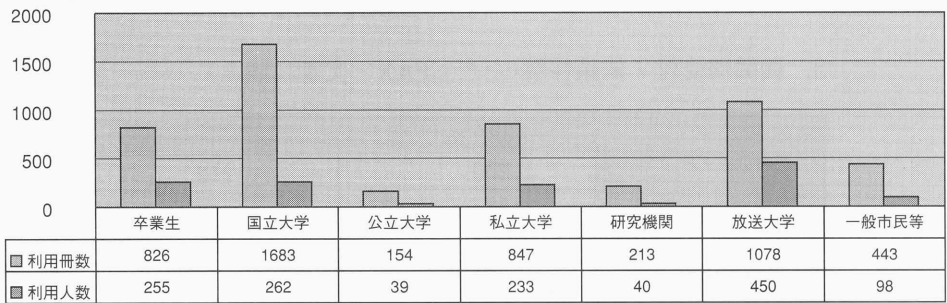
入館者5年間推移



分類別貸出状況



学外者の利用



貴重書利用状況

貴重書（特殊文庫）閲覧上位リスト

1. 富士川文庫（明治以前和漢医書、幕末期西洋医学翻訳書 約9,000冊）	1,005冊
2. 河合文庫（朝鮮の文書・典籍 2,160冊）	617冊
3. 近衛家本（漢籍等 3,050冊）	421冊
4. 谷村文庫（古写経、古版本、連歌関係、9,200冊）	256冊
5. 平松家本（朝廷の儀式典礼等 1,886冊）	213冊

貴重書 掲載許可等

掲載	78件	パネル作成	4件
翻刻	15件	TV放映等	8件

無償貸与（展示会等）件数 9件（15点）

参考業務

文献調査

1. 受付件数

		平成9年度(件)	平成8年度(件)
内容	所蔵調査	13,761	8,673
	事項調査	333	398
	その他	1,919	2,698
	合計	16,013	11,769
形式	FAX(文書を含む)	4,318	4,701
	電話	6,943	1,510
	カウンター	4,752	5,558
	合計	16,013	11,769

2. 依頼件数

		平成9年度(件)	平成8年度(件)
内容	所蔵調査	226	174
	事項調査	21	16
	合計	247	190
形式	FAX(文書を含む)	235	181
	電話	12	9
	合計	247	190

3. 機関別受付・依頼件数(ただしFAX・文書に限る)

機関名	受付件数(件)	依頼件数(件)
国立大学	1,250	118
公立大学	182	8
私立大学	2,032	86
国立共同利用機関	84	9
公共図書館等	169	9
非営利団体	21	8
一般企業	252	0
個人	328	0
国立国会図書館	0	9
合計	4,318	247

4. 学内者・学外者別利用件数

学内者	7,982
学外者	8,031
合計	16,013 (件)

相互利用

1. 他大学図書館訪問利用

	平成9年度(件)	平成8年度(件)
発行件数	1,311	1,250
受付件数	3,364	3,356

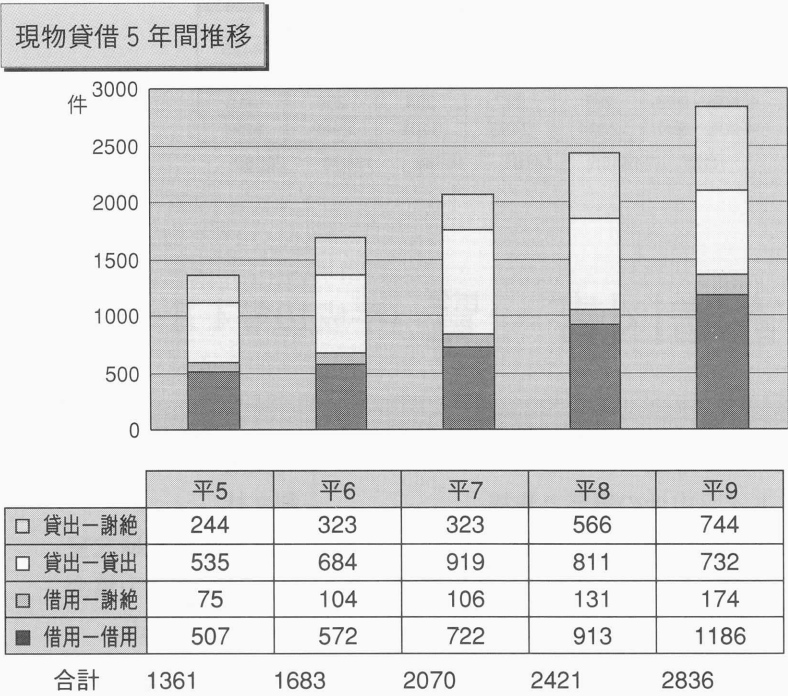
内訳：

	発行	受付
共通閲覧証	451	1,444
資料利用願	753	1,838
特別利用願	107	82

(件)

*共通閲覧証：国立大学間共通閲覧証
*特別利用願：国立大学附属図書館間夏季休暇中の特別利用願

2. 現物貸借



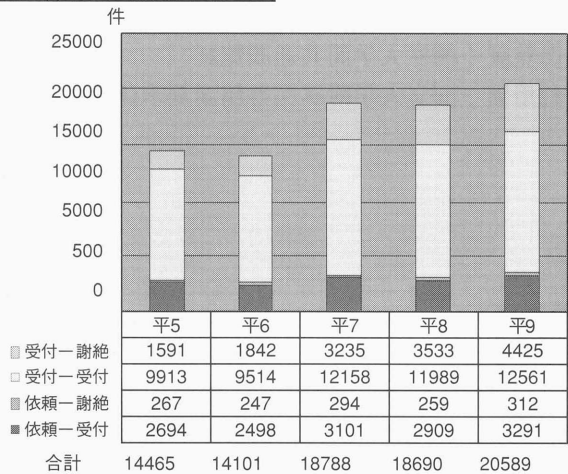
3. 文献複写

	平成9年度(件)	平成8年度(件)
依頼	4,772	4,926
受付	20,039	18,476
合計	24,811	23,402

内訳：

	国外	国内	学内	合計
依頼	265	3,603	1,004	4,872
受付	0	16,986	3,053	20,039
合計	265	20,589	4,057	24,911

文献複写(国内)5年間推移



教官寄贈図書一覧 (平成10年4月～8月)

身分	寄贈者氏名	寄贈図書名	出版社	出版年
教授	岡田 章	ゲーム理論	有斐閣	1996
教授	服部良久	ドイツ中世の領邦と貴族	創文社	1998
教授	夫馬 進	使琉球録解題及び研究	文学部東洋史研究室	1998
教授	渡辺弘之	アグロフォレストリー ハンドブック	国際農林業協力協会	1998
教授	上林彌彦	Advanced Database Research and Development Series No.8,No.9	World Scientific	1998
教授	長尾 真	Monographs of the Center for Southeast Asian Studies, Kyoto Univ. English-language series no.20	Univ. of Hawaii Press	1998
名誉教授	中垣正幸	ハイブリッド薬剤学	丸善	1998

教授	長尾 真	SEMPER APERTUS sechshundert Jahre Ruprecht-Karls-Universitat Heidelberg 1386-1986 Band 1-6	Springer-Verlag	1985
教授	長尾 真	BELALONG a tropical rainforest	The Royal Geographical Society	1994
教授	長尾 真	Seoul National University Museum 1997-1998	同左	1995
教授	長尾 真	ソウル大学校博物館所蔵 韓国伝統絵画	ソウル大学校博物館	1993
教授	長尾 真	発掘遺物都録	ソウル大学校博物館	1997
教授	長尾 真	環太平洋諸国の興亡と相互依存	京都大学学術出版会	1998
教授	長尾 真	語る身体の民族誌	京都大学学術出版会	1998
教授	長尾 真	動力波をとらえる	京都大学学術出版会	1998
教授	安井邦夫	現代論理学	世界思想社	1995
教授	富岡 清	Asymmetric Synthesis	講談社	1998
教授	石原 潤	河南省登封市の市場経済化の地域変容	大学院文学研究科地理学教室	1998

* * * * *

目 次

* * * * *

巻頭言「ハイブリッド型図書館」の充実を	1
印刷文化と手稿－ヴァレリーにおける〈モノとしての書物〉	4
全学共通科目「情報探索入門」の試み－図書館の役割について	5
シリーズ「京都大学図書館巡り」序	6
OPACを使ってみませんか－利用の手引きシリーズ	7
京都大学附属図書館秋季展示会予告	8
図書館の動き	8
附属図書館利用統計（平成9年度）	9
教官寄贈図書一覧	14
蔵書統計（平成10年3月31日現在）	16
編集後記	16

京都大学附属図書館館報「静脩」

Vol.35 No.1（通巻127号）

発 行 1998年9月30日

編 集 静脩編集委員会

（責任者：附属図書館事務部長）

発行者 京都大学附属図書館

京都市左京区吉田本町

Tel.075-753-2613

蔵書統計（平成10年 3 月31日現在）

部 局	受入冊数		蔵書冊数		入力件数	
	和書	洋書	和書	洋書	和書	洋書
附属図書館	7,108	2,767	522,994	263,137	159,115	47,386
総合人間学部	3,704	2,386	307,120	266,239	35,034	59,144
文学部	10,876	8,106	478,264	320,338	11,672	46,465
教育学部	1,845	986	72,277	55,455	23,789	15,844
法学部	3,304	5,292	239,100	325,080	25,053	34,929
経済学部	4,180	3,396	216,469	209,651	16,822	21,223
理学部	645	1,287	45,932	198,963	11,549	33,041
医学部（附属病院含む）	903	2,074	48,218	133,178	3,736	3,734
薬学部	239	1,107	11,579	30,826	2,433	1,615
工学部	2,303	4,342	138,794	256,652	25,434	31,283
エネルギー科学研究科	420	51	1,638	1,214	366	256
農学部（附属農場含む）	1,673	1,294	166,155	141,801	13,657	6,914
農学部演習林	82	81	10,054	3,107	1,927	620
化学研究所（宇治 5 研）	97	926	28,535	87,989	1,829	11,819
人文科学研究所	3,518	1,100	423,416	69,096	12,562	13,247
胸部疾患研究所	0	186	1,611	5,361	43	161
基礎物理学研究所	117	1,534	8,073	70,685	964	15,879
ウイルス研究所	0	91	484	9,915	113	994
経済研究所	596	491	39,768	32,631	2,392	8,608
数理解析研究所	23	692	6,246	67,493	3,713	26,683
原子炉実験所	15	624	12,553	31,374	890	1,513
霊長類研究所	66	366	5,665	12,302	2,248	1,477
東南アジア研究センター	832	3,108	19,593	66,609	7,466	16,878
大型計算機センター	152	303	4,819	10,909	2,231	4,060
生態学研究センター	28	108	1,747	4,445	257	900
医療技術短期大学	403	97	23,430	5,480	2,929	1,295
人間・環境学研究科	757	1,035	8,532	19,276	5,500	14,133
高等教育教授システム開発センター	96	76	557	283	0	0
その他研究所・センター等	21	101	4,101	6,136	583	1,410
合 計	44,003	44,007	2,847,724	2,705,625	374,307	421,511
和洋合計	88,010		5,553,349		795,818	

（単位：冊）

編集後記

今年はとりわけ異常気象である。東日本では、梅雨明け宣言もないまま夏が終わり、大洪水で大きな被害が残った。関西も、今までに経験したことのない季節の巡りようである。社会情勢も、経験だけで推し量れない状況が我々に襲いかかってくる。自分の経験した「昔」が夢のように遠いものに感じられる。図書館も厳しい予算削減、定員削減に今までにない新たな対応が迫られている。利用者に図書館をもっと知ってもらえるような、図書館と図書館が協力し合って図書館のあり方をさぐっていく一助となるような館報を作りたいと考えています。（み）